



ものづくり、人づくり

愛知工業大学 学長 後藤 泰之

愛知工業大学は、平成21年に開学50周年を迎えます。

祖父の代から、半世紀以上にわたる愛知電機(株)と名古屋電気学園との交流に思いをはせながら、何を申し上げればいいのか、しばらく悩みました。そして、技報の巻頭には少し場違いかもしれませんが、現在、私立大学が直面している課題とそれに対する本学の取り組みについて、率直に申し上げることにいたしました。

私立大学を取巻く状況はますます厳しいものとなっています。少子化や大学の増加など基本的な要件に加え、理工系離れや産業の空洞化、産業構造の変化などは、工業系の大学に共通する問題とっていいかもしれません。また、単科大学に対するイメージや立地条件といった、ある意味で愛工大に特有な課題もあります。計算上すべての志願者が大学に入学できる、いわゆる「大学全入時代」に、限りなく近い状態にあるといわれています。事実、私立大学の約半数が定員割れを起こしている状況にあります。このような状況にあって私立大学は、独自の理念、建学の精神を高く掲げて、教育と研究の振興を通して、社会的貢献を果たしていかなければなりません。

昨年度の卒業式で、「多くの難問が山積しております。しかし、どんなに困難に思える問題でも、必ず解決できると信じています」と、卒業生に向かって話しました。

大学運営においても、その気持ちに変わりはありません。「自由・愛・正義」の建学の精神の下、「創造と人間性」の教育のテーマを掲げて、人間性に豊かな意欲溢れる人材を育成するという愛工大の社会的な使命を果たすために最大の努力を傾注しなければなりません。

先に申し上げたとおり、厳しい入試状況にあって、教育の現場では、学生の学力の二極化が重大な問題となっています。これに対しては、「学生の潜在力を引き出す」という観点から、科目の枠組みやカリキュラムの見直し、FD活動の一層の活発化など、スピード感を大切にして、必要な教育改善を実施しています。一方で、学生の職業観やライフスタイルには大きな変化が起こっています。従来のキャリアデザインやキャリアガイダンスでは十分に対応できなくなってきました。

開学50周年の記念事業の一つとして、今夏公開予定の劇場用映画を製作しました。大学が本格的に映画製作に取り組む前例はないと聞いています。タイトルは「築城せよ!」、主演は片岡愛之助とヒロインの海老瀬はな、その他、阿藤快、江守徹、藤田朋子といった有名な出演者のほかオーディションで選ばれた愛工大生2人もヒロインの友人役で出演し

ています。

ストーリーは、戦国武将の魂が、さえない現代の町役場職員に乗り移り、段ボールで城を築くという無謀な計画を通じて、過疎の町を一つにするというコミカルなものです。

映画製作によって、大学の知名度を高めようという狙いからではありません。映画は総合芸術であり、文化を発信する上で極めて有効な媒体の一つだといわれています。また、映画はものづくりの集大成であるともいわれています。今回の映画製作について、「ものづくり、人づくり、地域づくり」という三つのテーマを設けました。

まず、撮影をものづくり教育の現場として活用しようと考えました。学生たちも8月ごろから発泡スチロールでの石垣製作や段ボールでの城製作に取り組みました。また、撮影の補助やエキストラとして参加した学生、教職員も含めれば延べ500人以上の人たちが映画作りを支えてきました。撮影は長久手、日進、名古屋などすべて大学周辺で行われました。地域にもご協力いただき、豊田市は高さ28メートルの段ボールの城を建てた猿投地区の撮影場所までの道を舗装、瀬戸市の商店街では武将が馬で走るシーンを撮影しました。池を渡る場面のために大学の地元自治会の皆さんが2日間かかってため池の水を抜いてくれました。

映画製作が本学にもたらした多くの教育的な効果については今後検証していきたいと思いますが、少なくとも、参加した学生諸君や教職員の皆さんは、一つのことを成し遂げたという大きな感動が得られたと思っています。

愛工大は、現在、工学部に加え、経営学部、情報科学部という3つの学部、大学院には工学研究科、経営情報科学部という2つの研究科を擁するまで発展しました。今後は、開学以来一貫した伝統である「実学教育」の観点から、教育、研究の活性化を図るために何事にも積極的に取り組んでまいります。

正直、前途は多難です。しかし、課題を必ず克服し、進化し続けられると信じています。